

# つまさきチミーのはなし



ベアトリクス・ポッター さく・え

おおくぼ ゆう やく

# つまさきチミーのはなし



ベアトリクス・ポッター さく・え  
おおくぼゆう やく



モニカを はじめとする これから ともだちになる こどもたちへ





むかしむかし あるところに つまさきチミーという ころころぷくぷく おきら  
くな はいいろりすが おりました。 たかい きの てっぺんに くさぶきの す  
みかがあって、 グディという おくさんの りすも います。



つまさきチミーは そとで すわって、 そよかぜを たのしんでいました。 し  
っぽを ひとふりして くすくすわらい —— 「いとしの グディ、 きのみが  
たわわだ。 ふゆ・はるのために たくさん たくわえておこうよ。」 つまさき  
グディは いえの うちがわに こけを ぬりこめるのに ていっばいです。「この  
おうち、 いごこちいいから きっと ひとふゆ ぐっすり ねむれるわ。」 「そん  
なら おきたら そのぶん げっそり、 はるには たべもの ないってか。」チミ  
ーは なんでも きにしがち。



きのみの やぶへ やってきた チミーと グディでしたが、 見てみると そこには もう ほかの りすたちが います。

チミーは うわぎを ぬいで こえだに ひっかけ、 はなれたところで おとなしく ふたりだけで うごくことにします。



まいにち あちこち めぐって きのみを めいっぱい ひろいました。 ふくろ  
に つめてはこんで、 すを つくった きのでばに あちこちある ねもとの あ  
なほこに つめたのです。



あなぽこが まんぱいになると、こんどはきのたかいところにあるうろあなへとふくろをあけはじめました。もとはきつつきのもので、きのみはころりんころころとなかへおちていきます。

「いったいどうやってあとからとりだすの？ ちょきんばこみたい！」とグディ。

「はるに なるまでには げっそり やせてるって、なあ。」とあなをのぞくつまさきチミー。





こうして たくさん あつまりましたが —— そのひけつは なくさなかったからなのです！ ふつう りすは きのみを じめんに うめるから、 はんぶんは なくしてしまうもの。 だって ありがが おぼえられなくて。

もりで いちばんの わすれんぼの りすは、 シルヴァテルと いいました。

ほってるそばから わすれるから、 あとで ほりかえすと じぶんでない きのみが でてきたりして。 それで けんかになつたり。 すると みんなして ほりだすから —— もりじゅうが おおさわぎ！



そんなとき おりあしく ちょうど ことりの むれが とんできていて、 やぶから やぶへ あおむしや くもを さがしまわっていました。 いろんな とりがいて、 それぞれ べつべつの うたを さえずるのです。

はじめの とりは こう。「だあれが ほりだした、 ほおくの きのみ。 だあれが ほりだした、 ほおくの きのみ。」

つぎの うたは こう。「パあんが ちょびっと、 チーズなし。 パあんが ちょびっと、 チーズなし。」



りすたちが みんなして おいかけ、 みみを そばだてます。 はじめの とりが とびこんだ やぶでは、 チミーと グディが しずかに ふくろを しばっていました。 そこへ ことりの うたです —— 「だあれが ほりだした、 ぼおくの きのみ。 だあれが ほりだした、 ぼおくの きのみ。」

つまさきチミーは きにもせず やることを ひたすらやるだけ。 そもそも ことにしても だれのことを うたうでもなく、 いつもどおりに うたっているだけで、 どういうつもりも ありません。



けれども まわりの りすたちは そのうたを きくと たばになって つまさき  
チミーに とびかかり、 なぐる、 ひっかく、 きのみを ふくろを ひっくりか  
えす。 さて はからずも このさわぎの もとを つくってしまった ことりです  
が ぎょっとして とびさってしまって！

チミーは くるくる ごろごろ ころがりましたが、 そこから しっぽを かえ  
して、 すみかの ほうへ にげだしました。 おいかけてくる りすのむれが わ  
めいています —— 「だあれが ほりだした、 ぼおくの きのみ！」





やがて チミーは つかまり、 きのうえに ひきあげられて。 しかも そのき  
は あの まんまる こあなの あるやつで、 そこに おしこまれて。 あなは  
つまさきチミーには あまりに せますぎて、 ひどく ぎゅうぎゅう つめられた  
から、 あばらが おれなかったのが ふしぎなくらい。「はくじょうするまで ほ  
とところぜ。」と りすりすシルヴァテルは 言ってから、 あなのなかへ こう  
さげびます ——

「どいつが ほりだした、 おおれの きのみ！」



つまさきチミーは なにも こたえません。きのなかを ころがりおちて、じぶんの いれた なみなみした きのみ のうへへ がしゃん。すっかり きをうしなって たおれて うごけません。



つまさきグディは きのみの ふくろを みんな ひろいあげ、うちへ かえりました。チミーのために おちゃを 入れたのに、もどってこない こない。

そのひの よるは つまさきグディも さみしくて つらくって。あくるあさ おもいきって きのみの やぶに ひきかえし さがしてみようとしたのですが、ほかの りすたちから いじわるく おいはらわれてしまいました。

もりじゅうを さまよいながら よびかけます。

「つまさきチミー！ つまさきチミー！ ねえ、いったい どこに いるの？」



そうこうするうち つまさきチミーも きを とりもどします。 めを あけると  
ちいさな こけの ベッドに ふんわり くるまれていて、 まっくらやみのなか  
あちこち ずきずき。 どうも じめんのなかの ようでした。 チミーは げほ  
げほ うぐうぐ、 あばらが いたみます。 すると きゃっきゃと こえが して  
、 そこへ あらわれたのが ちいさな しまりすさん、 てに あかりを もって  
、 ぐあいが よくなったかと みにきたのでした。

しまりすさんは つまさきチミーに とても よくしてくれて。 ねぼうしを か  
してくれたばかりか、 うちのなかは たべものも どっさり。





しまりすさんは はなします。 なんでも きの てっぺんから ざあざあ きの  
みが ふってきたのだとか —— 「しかも うまってるのまで あってさ！」 そ  
こで チミーが いきさつを はなすと りすさんは けらけら くふくふ。 チミ  
ーが ベッドから うごけないのを いいことに、 なにかと わけを つけて、  
たらふく たべさせようとして。「でも、 どうやって ここから てるって いう  
んだい？ おいらが やせないことにやあ。 よめさんだって きっと しんぱいし  
てる。」 「あと もうひとつ —— いや もうふたつ。 わらせておくれよ。」 な  
んて しまりすさんが いうもんだから、 つまさきチミーは ぷくぷく ふとるば  
かりで。



さて つまさきグディといえは、ひとりきりで また しごとに とりかかって  
いました。でも もう きつつきの あなには いれたりしません。だって ど  
う とりだしたものと ずっと くびを かしげていたのですから。かくすさき  
は きのねの したで、ころりんころりん おとしていって。あるとき グディ  
が とくべつ めいっばいの ふくろを あけてみると、ぎゃあという こえが  
はっきり きこえました。それから つづけて グディが ふくろを もうひと  
つ もってくる、ちいさな しまりすが あわてて そとに はいだしてきて。



「かいだんの したは そろそろ いっぱい いっぱいな。へやも まんぱいで、ろうかにまで ごろごろ ころがってる。しかも だんなの しまりすハッキーは わたしを おいて いえでちゅう。この きのみ の あめあられは いったい どういうわけ？」

「ほんとうに ごめんなさい。わたし しらなくて、ここに だれか おすまい だなんて。」と つまさきグディさん。「それにしても、だんなさんの いどころ ですか。うちの だんな、つまさきチミーも いえでちゅうで。」「いどころは わかってるの。ことりが おしえてくれて。」と こたえるのは しまりすの おくさま。



しまりすさんは きつつきの きへ みちあんないして、 ふたりして あなへ  
ききみみを たてます。 すると したのほうで きのみ の からを わる おとが  
して、 それから りすの ふとい こえと ほそい こえが いっしょになっ  
て うたっています。

「うちの じじいと おれが けんかした  
さあて こいつを どう かたつける？  
おまえの すきに させてやるから  
とっとと うせろや このくそじじい！」





「あなたなら おしはいれてよ、 あのちいさな まるい あな。」と つまさき  
グディは いいました。「そうなんだけど。」と しまりすさん。「だんなの しま  
りすハッキーが かみついてくるの！」

したのほうから きのみを わって かじる おと、 それから りすの ふとい  
こえと ほそい こえの うたが きこえてきて ——

「きょうは いちにち だーらだら  
だーらだらったら だーらだら！  
だーらだらだら いちんちじゅう！」



そこで グディは あなから なかを のぞいて、 したに よびかけました —  
— 「つまさきチミー！ ん、 もう、 つまさきチミー！」 すると チミーが  
こたえます。「おまえか、 つまさきグディか？ おお そうか！」

あがってくるなり あなから かおを だして、 グディに キスをして。 け  
れども ふとりすぎで やっぱり そとに でられません。

しまりすハッキーは そこまで ふっくらしてませんが、 こっちは こっちで  
でたくないのです。 ですから したのほうで じっとして くふくふ わらって  
いて。



というわけで 2しゅうかんのあいだは そのままでしたが、 とうとう おおあ  
らしが やってきて、 きの てっぺんを ふきとばし、 うえに おっきな あな  
が あいて、 なかへは あめが はいりほうだい。

ですので つまさきチミーは そとへ でまして、 かさを てに うちへ かえ  
りました。

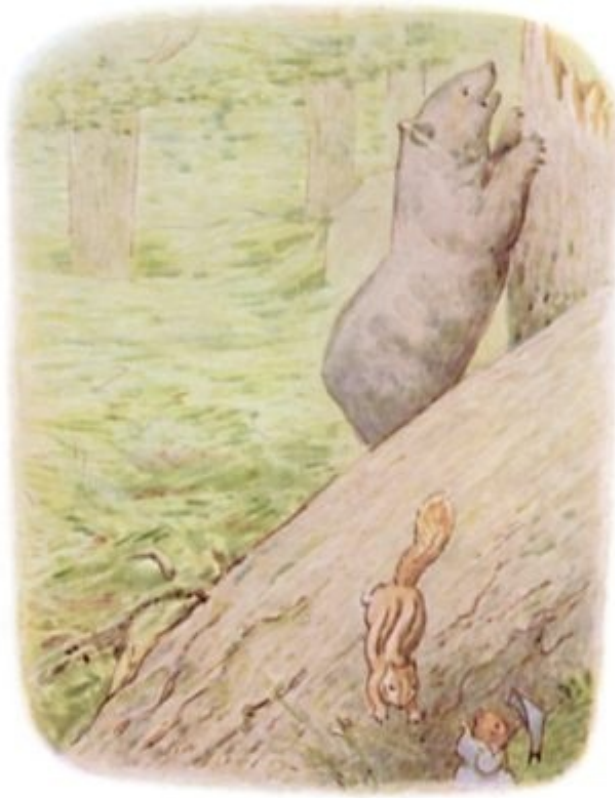


ところが しまりすハッキーは もう1しゅう のじゅくを つづけて、 と  
はいえ、 やっぱり おちつかなくて。



はてには おおきな くまが もりを ぬけようと ちかくを のっしのっし。  
ひよっとすると そいつも きのみを さがしてるのかも。 あたりを かぎまわ  
っているみたいで。





しまりすハッキーも おおあわてで おうちへ かえります！



こうして うちへと ついた しまりすハッキーでしたが、 どうも はなかぜを  
ひいてしまったようで。 まったく、 おちつかないったら ありやしない。



さて つまさきチミーと グディの ふたりと いえば、 きのみを ためておく  
ところに ちっちゃな かぎを つけて、 しっかりとじまりすることに しま  
した。



それから あのことりは しまりすを みかけるたびに、 こう うたいます —  
— 「だあれが ほりだした、 ぼおくの きのみ。 だあれが ほりだした、 ぼ  
おくの きのみ。」 けれども やっぱり、 こたえる ひとは いないのです！

(おしまい)

Original Text: *The Tale of Timmy Tiptoes* (1911)

Original Author: Beatrix Potter (1866-1943)



## つまさきチミーのはなし

<http://p.booklog.jp/book/32094>

著者：ベアトリクス・ポッター

訳者：大久保ゆう

発行：Alz

発行元情報：<http://p.booklog.jp/users/alz/profile>

※この翻訳は「クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本 ライセンス」  
(<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>) によって公開されています。  
上記のライセンスに従って、訳者に断りなく自由に利用・複製・再配布することができます。

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32094>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32094>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.